

新刊
紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be though expert in both.

住谷悦治著（同志社総長）「日本経済学

の源流—ラーネッド博士の人と思想」三

五〇円（東京教文館、新書版一五二頁）

一読して先づ想う——著者は良き師をも

たれ、ラーネッド博士はまた良き弟子をもたれた、と。私たちが他者について語るところは、私たちみずからの人格の反映であり、その不満の償いである。ここには、客観的資料を忠実に辿って、明治初年、同志社創立の日以後の僅か数日にして入洛し、爾後五十三年の永きに亘って、同志社に教鞭をとられたラーネッド博士の人と思想が、克明に語り続けられているが、そこに次第に浮き彫りにされてくるラーネッド博士の高潔な人格とその学風は、それを評

価する遠眼の土の見識を通さずしては、その奥床に到達することを許さぬ境地を示している。著書は、若きロマン・ロランが、レオナルド・ダ・ヴィンチについて母親に書き送った手紙のなかの言葉、「彼を完全に味うことのためには、彼と同じくらい偉大でなければならぬ。」のくだりを引用して、「冷汗三斗の恥ずかしさを覚えざるを得ない」と述懐してはいられるが、いまの学界で著者のごとくにラーネッド博士を語るに適格の人物は、他に類を求め得ないであろう。ただに思想のみではなく、その人物を語ろうとするとき、打てば響く協和音を奏で得る人間の素質が備えられていなければ、その真髓を躍如として眼前に示すことはできない。この書を読みつつ、私はラーネッド博士の現し身の傍えに立たしめられる想いがするのである。

ラーネッド博士は、宣教師として、同僚のデビス先生とともに、新島襄先生の同志社創立期の艱難とともにされたが、その生涯を貫く「博識・冷静・几帳面の性格」の人として、「泰然として動かざること山のごとく、怒濤の間に陰翳する巨巖のごと

き」悠々たる風格をもって、満身是れ火、是れ熱、是れ情の人デビス先生と相い助けて、同志社学風の確立に挺身せられたのであった。

ラーネッド博士は、同志社において、基督教教会史、基督教教理史、聖書神学、新約聖書、希臘語、羅旬語を主とし、他に同志社創業時代には経済学、政治学、天文学、物理学、高等数学、さては体操までも教授されたというのであるから、その「博識」はただものではない。明治期の文明開化の時流に棹さして、新知識を求める活力ある青年たちは、ピューリタニズムの本場コネチカット州生れのこの宣教師のキリスト教的人格主義と、当代の最新の学問との統一された重厚な風貌から、独特の学風を感じ取り、革新を迫られたに違いない。当時の同志社より輩出した安部磯雄、岸本能武太、村井知至、浮田和民、徳富猪一郎、徳富健次郎のごとき社会思想上の傑物、また海老名弾正、小崎弘道、宮川経輝、綱島佳吉、留岡幸助のごときキリスト教界の達人たちを一貫するヒューマニズムはまさに新島、デビス両氏の熱情的素質とともに、こ

のラーネッドの重厚な学風を反芻することによって、底固めされていたと云うべきであろう。当代の新興ブルジョアジー勃興期にあって、その創造的気力の担う独特の明るさの漲る時流に伍して、しかも同志社のゆく途は、すでにその次の時代を指さしていたのは偶然のことではない。

本書は題して、「日本経済学の源流」という。経済学徒として、大正十一年より昭和三年の帰米の日まで、ラーネッド博士に師事された著者の視線は、おのずから博士の経済学に集中される。博士の業績に関する文部省への報告書（大正十一年は、海老名弾正総長を通じて、奇しくも著者の執筆に委ねられた。博士の著書「経済新論」全四巻（明治十九年）「経済学之原理」（明治二十四年）への著者の評価が、注目を惹く。

前者に関して、「内容は現在の経済上の殆んどあらゆる範圍に亘り、引例は日本の實際より之を挙げ、適切な解決を指示す。当時、経済学上の独立の著書としては、翻訳書を除きては寥々たるものにして只、田口鼎軒の『経済策』、福沢諭吉の『民間経済録』、天野為之の『経済原論』あり

て、経済学界にその光輝を放つのみなりしも、ラーネッド博士の『経済新論』は、右日本初期の経済学界において、田中、福沢天野の三学者の書に比較し、勝るとも劣らざる内容を有す。仍て最近日本経済学史家により、明治における日本経済学の初期（明治以前は於ては経済思想は存在せしも、経済学は存在せず）の貢献者として認められつつあり」と論ぜられている。

後者に関しては、「科学としての経済学に関する定義乃至理解の如き、今日における世界の斯学の最も進歩せる諸学者と略、同一見地に立つ、殊に注意すべきことは本書における博士の社会政策に関する献言にして、明治初期における社会救済策の文献として貴重なるものたるを失わず。今日之を見るも尚ほ教えられる所、甚だ大なりとす。日本経済学界の曙光を放てる学者として、学界への貢献大なること学史家の認むる所となりつつあり。」と記されている。以ってラーネッド博士の学的地位を知ることができよう。

博士が同志社で経済学の講義を担当し始めたのは、明治十二年のことであった。日

本において資本主義の黎明期を迎えつつあるとき、博士は「経済学は富を得るの秘訣を教うるにあらず」「重大なる社会問題に関して勧告を与うるものなり」「是れ全国の福祉に関係する問題にして……西洋諸国に於て論題となれる社会党の運動も少しく経済学を知る者にあらざれば解する能わざる所なり」と教え、既に産業社会の自由主義、個人主義の競争とその弊害を認め、資本主義社会の「貧困」の問題を採り上げ、社会的救済策としての政府の助力を勧告する配慮を示していたという。わが国の社会政策学者が、ドイツ近代の「新歴史学派」に倣って、社会政策の講義を開始したのは、明治二五年以後のことであったが、ラーネッド博士はそれに遙かに先立って、社会問題に対決しているのは、驚異というほかはない。

著者は「人生における博士の倫理的な立場はキリスト教であり、経済学と倫理学の結合は、博士においては経済学とキリスト教倫理という特質をもっているといえ、経済学史上の地位・特質は、（63頁へ）